

いるは



日本と台湾との架け橋
財団法人 交流協会
Interchange Association Japan (IAJ)



住所: 10547 台北市松山区慶城街28号 通泰商業大樓
TEL: 02-2713-8000 FAX: 02-2713-0705
HP: <http://www.koryu.or.jp/nihongo/> (日本語センター)

29

2010年2月10日発行

発行: 財団法人交流協会日本語センター 編集: 伊藤幸行、謝秀玉 印刷: 加絨有限公司

台湾における年少者を対象とした日本語教育 佐藤貴仁 (台北事務所日本語専門家)

台湾における日本語学習者層の拡がり

今年度は当協会が三年毎に行っている「台湾における日本語教育事情調査」の調査年にあたり、作業は現在大詰めを迎えている。この調査は、台湾のどのような機関でどのような学習者が日本語を学んでいるのかを調べることを主な目的としているが、調査を進める中で見えてきたことの一つに、日本語学習者層の拡がりが挙げられる。

これまで台湾では伝統的に、大学などの高等教育機関を中心とした日本語教育が行われてきた。しかし、教育部(日本の文部科学省に相当)により施行された中等教育機関における第二外国語推進計画である「推動高級学校中学選修第二外国語文実験計画」(1996年-1999年)に始まり、「推動高級中学第二外国語教育五年計画」(1999年-2004年)を経て、「同二期計画」(2004年-2009年)が終了した現在、高校においても第二外国語として日本語を開講している機関・学習者が飛躍的に増加したことは、前号でも紹介したとおりである。

また、社会人を対象とした語学塾は勿論のこと、生涯教育機関や高齢者を対象とした「学齡中心」と呼ばれる市民大学、さらには地域のコミュニティーセンター等の各所でも、いわゆる成人を対象とした日本語科目が多数開講されていることが確認されている。その一方で、クラブ活動の一環として、実験的に日本語クラスを設けている中学校や小学校の第二外国語教育として日本語を導入している機関、就学前の児童を含む子どもを対象とした日本語学習塾でも、年少者が日本語を学んでいることが確認された。このように、人口比による日本語学習者数が世界一とも言われている台湾だけに、様々な形で日本語を学んでいる人々がいることが分かるだろう。

その中で、今回はまだ一般的とは言えない年少者に対する日本語教育の現状を取り上げ、児童・生徒を主な対象としたある日本語学習塾における取り組みについて以下に報告する。

年少者を対象とした日本語学習塾「Genkids」

台北市内にある「元気児童日語」(以下、Genkids)は、主に年少者を対象に日本語教育を行っている学習塾であ

る。通っている生徒は未就学児童、小学生が大半を占めるが、中には年少時から継続して日本語を学習している中高生を対象としたクラスもある。



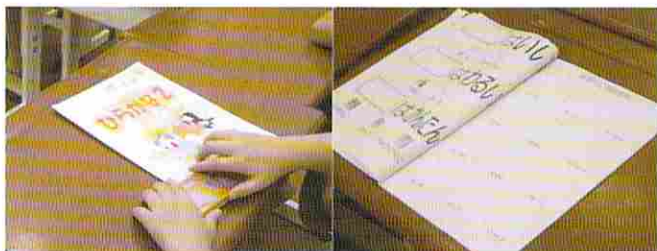
(高藤氏と学習者)

台湾は教育熱心な土地柄であり、幼少から色々な習い事や塾通いをしている子どもが多い。従って児童・生徒を対象とした英語塾も数多く存在するのだが、差別化を図るためか、一部では日本語コースを設けている塾もあるという。「Genkids」の前身も、英語塾に併設された日本語コースであったが、2004年に当時在籍していた教師仲間が独立を果たし、現在に至っている。英語塾の時代からコースに携わり、現在「Genkids」で教鞭を執っている齋藤晋輔氏に、「Genkids」の取り組みや年少者に対する日本語教育について話を聞いた。

年少者に対する日本語教育の苦労と工夫

「教え始めて苦労したのは、適当な教科書がなかったことです。年少者用の日本語教科書はあるのですが、英語と比較すると、そこまで成果が出せるものではありませんでした。独立前から、簡単な教材を作っていましたが、教科書ではなかった。自分達で試行錯誤しながら、形にするまでが大変でした。」と語るように、「Genkids」ではオリジナルの教科書を使用しており、品詞ごとに編集されているのが特徴的である。

「教科書は動詞、形容詞、名詞と分けています。多分子どもたちは品詞の意味はまだ分かっていないと思いますね。それでも分けて、最初から『これは動詞だ』ということを植え付けておかないと、年齢が上がって文法をしっかりと教えるようになった時に応用が効かないんです、文で覚えてしまうと。」



（「Genkids」オリジナル教科書）

上述の話から、経験から知恵を絞り、教科書を完成までに漕ぎ着けた様子が窺い知れる。また、これ以外に苦勞を伴っている点として、こどもを通わせている親への日本語学習に対する理解を仰ぐことを挙げている。

「親御さんが求めるのは、こどもが話せるようになることなんですね。もちろん教室内では話せるんですけど、家に帰って親が『じゃ、日本語喋って』と言っても喋れない。僕、九州出身ですが、急に熊本弁を喋ってと言われても、とっさに出てこないのと同じ。それを親は『できない』と勘違いしてしまうんです。」

結局、学習成果を証明するには、日本語能力試験など目に見えるもので示すしか方法がない。しかし、4級合格のレベルにまで達するには、学習開始から少なくとも4年は必要であると言う。言語学習の成果は即座に形となって現れるものではなく、長期的視野に立ち見ることが必要だが、早々に見切りをつけて、途中でこどもを辞めさせてしまう親も中にはいるそうだ。始めから読み書きを中心にカリキュラムを組めば、親が求める「目に見えた学習成果」が早く披露できるかもしれないし、教師側にとっても教え易い部分は多いかもしれない。それでも齋藤氏は自身なりの信念を持って教えている。

「まず、こどもには話してほしいというのが大前提にあるので、それを目標にやっています。ここでは、初めのうちはほとんど読み書きはしません。」

文字に頼らず音を頼りに外国語を学習することは、たとえこどもであっても想像以上に困難で、また教師にとっても骨が折れる教え方であることは想像に難くない。教えるにあたり、特別な方法や何か工夫していることはあるのだろうか。



（動作を取り入れた授業の様子）

「動作をつけて話させるとというのが、工夫している点じゃないかなと思います。例えば『見る』『聞く』『話す』などの動詞を覚える時には、実際その動作をしながら、リズムに合わせて声に出すようにしています。動詞の変化なども『見る』『見ない』『聞く』『聞かない』…というように。それをやり始めると、やはり格段に早

いですね、覚えるのは。」

こどもを対象とした授業の実際

今回見学したクラスでは、日本語の童歌を歌いながらジャンケンをしたり、席を立って言葉を覚えたりと、体を動かしながら学習している姿が多く見られた。これには、動作と発声の連動により記憶を促進させる効果や長時間座っていることが難しいこどもに対しては、授業の合間に動作を取り入れた学習をすることで、集中力を途切れさせない効果もあるのだろう。学習者の注意を惹くために絶えず動き、手を替え品を替え授業をリードしている教師の姿は、学生や社会人を対象とした授業とは大きく異なる。そこで、成人を対象に教えたこともある齋藤氏に、教師として対象者が大人とこどもでは何が違うのかを尋ねてみた。

「達成感ですかね。多分、大人は教師が知識を与えれば、大部分がその後自分で勉強することができるので、確かに上手にはなるかもしれませんが、教師としてはそんなに達成感はないかもしれません。でも、こどもに対する教育は教師がどれだけ教えられるかにかかっているんです。簡単に言えば、授業の手を抜こうと思ったら、できます。こどもは文法なんて分からないから、ただ単に楽しくさえすれば、どれだけでもサボれるものなので。だから教師は意図を持ってしっかり教えないと、こどもは伸びないと思います。100%教師でそのこ



（活動の様子）

どもの成長が決まると言っても、僕はいいと思うんですけどね、個人的な意見ですけど。だからそのゼロから始めた学習者がどんどん上手になったら、凄い達成感があります。その成長の過程を見て、あっ、今『て形』の段階にきた！とか、あっ、『過去形』入れられるようになった！とか。そんな風に自然に喋っているのを見ると、『うれしいなあ』と感ずます。こどもは大人と違って授業中も元気なので、大変なこともあるし、躰が必要な部分もありますけど、でもそれでもやっぱり、僕はこどもの方が全然楽しいですよ。」

今後の希望

今後は、まだ研究段階にある年少者に対する日本語教育の実践報告や教授法についての情報などを台湾から発信していき、できればその教授モデルや教育方法を確立させたいと語る齋藤氏。そのためにも、横の繋がりを強くし、同様の年少者日本語教育に携わっている者同士が協力し、将来的に情報交換の場を設けることや教育実践について共同で研究などができれば、という希望を持っている。

「Genkids」での実践から、一つの教育法を確立させるという夢の実現に期待を馳せつつ、次世代の台湾と日本の架け橋になるであろう未来を担うこどもたちとともに、末長く歩んで行けるよう、願わずにはられない。

「うまく言えない」を尊重する
—TAEを応用した日本語教育—
得丸さと子氏(日本女子体育大学教授)
陳淑娟氏(東呉大学教授)

1. 「うまく言えない」を尊重する

母語で話すからといって、常に言いたいことが適切に表現できるとは限りません。誰しも、うまく言えずに口ごもったり、何かを書きかけて頭を抱えたりした経験があるでしょう。まして、学習言語で表現するとなると、「うまく言えない」を抱えながら、「言える」表現との接点をさぐることの連続です。

日本語教師として学習者に接するとき、教師は学習者の「うまく言えない」に、どのように対処すればよいでしょうか。「正しい日本語表現を数多く教え込む」ことが重要でしょうか。「すばやく話し始め、流暢に話し続けるように訓練する」ことが大切でしょうか。どちらも正解といえます。しかし、その活動の前に、あるいは、その活動の途中で、学習者自身の中で「表現したいことと言葉が出会い、形を得るプロセス」が、しっかりと位置付けられなくてはならないでしょう。それは、「うまく言えない」を尊重することでもあります。

本稿で紹介するTAE(Thinking At the Edge)の考え方に立つ日本語教育は、「うまく言えない」を尊重し、学習者自身が「表現したいことが表現できるようになるプロセス」に働きかける教育法です。Edge(エッジ)は、「端」を意味します。「言いたいこと」は「言えること」よりも、いつも広く深いのです。「言えること」の端がEdgeです。その場所を尊重し、そこに止まり、「言えること」を広げていこうとする考え方です。学習者が自分で(自分から)言えること(書けること)を拡充する教育法だといえます。

2. フェルトセンスをつかむワーク

TAEは、米国在住の哲学者でもあり心理臨床家でもあるユージン・ジェンドリンと夫人のメアリー・ヘンドリクスが開発した思考法です。ジェンドリンは、人は口ごもるとき、あるいは書きかけて頭を抱えるとき、「言いたいこと」を直接、感じているのだといいます。そして、そのとき感じている感覚を「フェルトセンス」(felt sense, 感じられる意味)と名付けました。フェルトセンスは、言語を媒介とせず、直接「言いたいこと」を感じる感覚です。

この方法では、最初に「フェルトセンスをつかむ」ことが重要です。たとえば、いままで旅行した場所の中で好きな場所、あるいは、よく行くお気に入りの場所にいるときの感覚を呼び起こし、そのフェルトセンスを感じます。そして、そのフェルトセンスを感じながら、浮かんでくる単語を、句点で区切りながら並べて書きます。これが「フェルトセンスをつかむワーク」です。初級の場合は母語を使って書き、辞書で対応する日本語を調べ、発音練習をおこなった後、ゆっくり日本語を言いながらフェルトセンスを味わおうとよいでしょう。ペアを組んで読み上げてもらい、フェルトセンスを感じながら聞く活動もよいでしょう。

3. 作文教育への応用

この項では、『TAEによる文章表現ワークブック』p.57-63を中心に、作文教育への応用展開例を紹介し、まず、「キャッチコピーを創る」ことから始めます。「フェルトセンスをつかむワーク」で並べた語を最低1つ入

れ、フェルトセンスを表現する短い1文を作ります。初級の場合は、学習者の単語リストを見て教師が文の候補を提示し、学習者に選んでもらってもよいでしょう。このワークでは、キャッチコピーのような印象的な文ができます。しかし他人に理解してもらうには情報が足りません。誰かに説明するつもりで2、3文、加えます。ペア・ワークや母語の活用も有効です。

次に、短い作文に発展させます。①最初にキャッチコピー(1文)を書き、②次に、説明の文(2、3文)を書き、③その後、5W1Hの要素を入れながら、テーマの「お気に入りの場所」に行った経験を詳しく書きます。このとき「フェルトセンスをつかむワーク」で書いた単語リストを使います。通常の作文執筆同様、必要な言葉は途中で自由に足しますが、最初にフェルトセンスをしっかりと感じておき、常にそれを参照する点に特徴があります。④最後に、キャッチコピーとその説明を、もう一度書いて締めくくります。意味を変えずに表現に変化を加えて書きます。この方法で書くと、印象のくっきりした、まとまりある文章ができます。

4. 会話教育への応用

この「うまく言えない」を尊重する方法は作文教育のみならず、会話教育にも応用できます。以下コミュニケーションの口頭表現を目標とする初・中級の教室活動の利用方法を紹介します。まずは、授業に臨む際、7原則を心がけるとよいでしょう。(1)フェルトセンスに基づく発話。(2)現実性・有意味性のやり取り。(3)話したくない時、無理やり話させない。(4)母語の使用を尊重。(5)関連語句の教材を作成。(6)ワークシートをまめに使う。(7)振り返り・シェアリングをする。基本的に学生のフェルトセンスを支え、それを聞き出すのが教師の勤めで、会話の第一歩ではあるが、学生数の多いクラスではペア・ワークで教師代わりに上手な「聞き手」を訓練します。具体的に会話の展開は「聞き手」の質問により繰り返されるのです。そこで、基本レシピが3つのタイプになります。つまり、「質問形式」(聞き手が5W2Hの質問文で聞く)、「傾聴形式」(聞き手はうなずき、相づちを打ち、伝え返す)、「反復質問形式」(聞き手が同じ質問を繰り返し相手に投げかける質問法)で、聞き手の「支え役」を決めておきます。それにそって、『TAEによる文章表現ワークブック』P.16-81にある教室活動の部分部分を会話授業へ展開できます。以下はそれぞれのトピックによって考案したものです。①リラックスのワーク(身体部位を学ぶ)②トラストウォークのワーク(移動動詞を学ぶ)③色模様のワーク(色彩を学ぶ)④花束のワーク⑤自分史作り(喜怒哀楽の事柄を述べる)⑥節目のペリオド⑦わたしの将来(ねらい・希望を言う)。また以下のようなトピックで更なる発展例が考えられます。⑧私の名前の意味⑨心の掟⑩からだの症状とわたし⑪内観インタビュー⑫新たな星へ⑬わたしが応援したい人⑭私の好きな場所⑮さくぶん.orgに投稿する(会話から作文へ)。要するに、日常でよく感じること、興味、好き嫌いなもの、違和感の気持ちの意見をお互いに聞き、交換した後、作文に発展することも可能です。

参考文献

- 得丸智子(2008)『TAEによる文章表現』図書文化
飯野哲朗(2005)『思いやりを育てる内観エクササイズ』
細川英雄・蒲谷宏(2008)『日本語教師のための「活動型」授業の手引き』スリーエーネットワーク
Eugene T. Gendlin and Mary Hendricks(2004)Thinking At the Edge(TAE)Steps. 『Folilo』Vol.19, p.12-24

徐興慶氏

(台湾大学日本語文学系教授兼系主任、
台湾大学日本語文学研究所教授兼所長)

今回は台湾大学教授の徐興慶氏へのインタビューをお届けいたします。台湾大学で開催している「台大日文的学的新視野暨研究生研習營」、台湾北部の7つの大学院による「北区校際大專院校碩土班連合研究發表大会」、そして大学院生や大学院進学希望者へのメッセージを伺いました。

台湾では文学、日本語学、日本語教育学分野のシンポジウムや学会等が台湾各所で数多く開催されています。

台湾大学でも「台大日文的学的新視野暨研究生研習營」を開催していますが、開催にあたっての動機や目的は、どのようなものなのでしょう。

まず開催時期について、1回目は2008年だったのですが、この時は学期中ということで、参加したくても参加できなかった大学院生・教員が大勢いたので、調整しなければならぬと感じました。そこで、開催時期についてアンケートを行い、2009年は6月23日-24日にしました。この時期であれば、年度終了直後なので教員は授業がなく、大学院生も期末試験やレポートを提出し終えるので、ほっと一息つき、さあこれから何をしようかという時期なので、ちょうどいいかと。

次に、「台大日文的学的新視野暨研究生研習營」を始めようと思ったきっかけについては、台湾では国際シンポジウムや講演会等がたくさん開かれているけれども、専門性が高すぎて大学院生が聞いてもわからない。そこで、大学院生が聞いてわかるものがいいと思ったんです。これまでも大学院生の発表の機会はあるにはありましたが、主役は教員でした。ですから、非常に発表の機会が少ない。

教員の発表は、それぞれの分野の専門性が非常に高く、先生方は楽しいかもしれませんが、大学院生が聞いてもわからない分野がたくさんあるわけです。

別の角度から考えると、専門性の高い論文を聞くよりも一つのジャンルで非常に明瞭な研究方法論、あるいは教学の経験のお話を大学院生に語ってもらい、大学院生に勉強してもらおうと。大学院生はしっかりそうしたお話を聞いたうえで、自分の今後の論文執筆に活かしてもらいたいというのがねらいです。

大学院生が一番関心を持っているのは、自分がこれからどのような研究方法を確立していくか、研究方法の手順はどのようなものか、資料はどのようにして探しますか、論文をどのように読んでいくか、どのように解釈す

るか、どのように自分の結論を作るか、という方法論がわからない。それぞれの先生にはっきりした経験を語ってもらうことで大学院生にわかってもらいたいですね。

「台大日文的学的新視野暨研究生研習營」を通じて台湾大学の学生だけでなく、台湾の大学院生に少しでも役に立てることができればいいと思います。

台湾日本語学会と北部の7つの大学院による「北区校際大專院校碩土班連合研究發表大会」は新しい試みだと思うのですが、これにつきましては。

現在、人文系の大学院新設は難しいので、今ある日本語関連の14の大学院が各々どのような目的を念頭に置いて発展させていくのが重要だと思います。淡江大学・台湾日本語学会の主催で第1回「北区校際大專院校碩土班連合研究發表大会」を開催しました。(編集部補註：第2回「北区校際大專院校碩土班連合研究發表大会」は2010年1月、東呉大学にて開催された。)北部の方だけでなく、中部や南部の方にも来ていただき、問題点を指摘してほしいと思います。

大学院生、そして大学院への進学を希望している方々へメッセージはございますか。

自分は何のために大学院への進学を希望するのか、じっくりと考えなければならぬと思います。

高い学歴がほしい、修士号や博士号を取りたいというのは大いに結構なことなのですが、ただ高い学歴が欲しいという目的だけで大学院へ進学するのは危ないと思います。自分は大学院に入って何をするのか、また将来自分の就きたい職業とどのように結びつけていくのか、じっくりと考えることが必要だと思います。

一案として、日本語を、大学院での専攻を決める上で一つのツールと捉え、日本語学や日本文学、日本語教育以外の別のジャンルを専攻するという選択肢を考えてみるのもいいんじゃないかと思っています。

どの分野を専攻するにしても、本当に自分が興味関心のあることは何なのかということを考えないといけないと思います。自分はどのようなことに興味関心があるのかを見つけることが一番大切です。自分が興味関心のあることをいつまでも持ち続けている人が就職した後も研究者として一番長くやっていけるものです。そうでないと、単に自分は大学の教員になりたいと言って博士号を取ったまではよかったが、博士号を取った後に大学教員として何をすればいいのかわからない、研究や仕事がおもしろくないということになってしまったら、それはもったいないことです。

自分が本当に興味関心のあることがあるのかどうか、あるとすればそれはどういったものなのかということをも自分自身に問いかけることが大事なことです。

<インタビューを終えて>

現在、台湾における日本語・日本語教育関連学会はひじょうに多い。そのような現状をふまえ、大学院生にとってどのようなことが必要か、また大学院生にとってどのようなことが足りないかを分析し、果敢に実践をしていこうと徐興慶先生の語り口からは穏やかな中に並々ならぬ決意が感じられた。

(伊藤孝行、台北事務所日本語専門家)



2009年度台湾人日本語教師本邦研修報告

2009年7月6日から25日までの20日間、杏林大学八王子キャンパスにおいて、台湾の中等教育機関に所属する日本語教師を対象とした台湾人日本語教師本邦研修が行われた。この研修は、当協会が杏林大学に委託し、1998年から実施しているものである。研修に参加した方々から寄せられたアンケートより一部紹介する。(回答部分はそのまま掲載した。)

総合的なふりかえり

- それまでの学習・教育経験を見直す機会になった
- 言語教育の理念の再更新ができた
- いつも仕事に追われているので、まとまった勉強の時間が確保することができないのでよかった

より具体的なふりかえり

- 教室でのアクティビティの意味・運用法を勉強し、今まで気づかなかった注意点・アクティビティと学習者との釣り合いなどについて勉強になった
- 従来の教授法と違った内容・方法を指し、グループごとに教材を試作し、その教授法や使用方法について全員で検討したりすることは、私にとって、「ポーン」というような目覚めの効果があります

新たな学び

- 研修仲間との情報交換、実際に指導方法についての意見交換ができた
- 自身の専攻以外のこと(日本語学、日本語教育史)について学ぶことができた
- 日本語学科出身でも音声研究や漢字の読みの指導法については勉強したことがなかったので、役に立った

交流の場

- ふだんなかなか知り合う機会のない地域の日本語教師とのふれあいができた
- 講師の先生方と受講者との間で積極的な意見交換ができた

また、「日本という生教材」ということばも何名かの回答にあった。

この研修の他にも日本語センターでは中等教育機関で日本語を教えている先生方を対象とした中等教育機関日本語教師研修会等、さまざまな研修会を開催している。

各研修会については、日本語センターHPに随時お知らせを掲載している。また、研修者IDをお持ちの方にはメールにて中等教育機関日本語教育研修会等の研修会のお知らせをお送りしている。そちらにもふるってご参加いただければと思う。

(伊藤孝行、台北事務所日本語専門家)

「日本語専門家派遣事業」がスタートしました。

新規事業として、2009年度から「日本語専門家派遣事業」が始まりました。これは、高校や大学など、日本語教育機関からの求めに応じ、交流協会に所属する日本語専門家が学校へ出向いて講義や研修会、ワークショップなどを実施するというものです。

第1回は高雄事務所の桜井が担当しました。2009年6月5日、会場校は東海大学です。日頃の仕事の管轄は南部地区なので、台中で授業をするのは初めてでしたから、学生さん達はどんな様子かとわくわくして出向きました。当日の講座は授業のない午後2時～4時に設定されていましたが、緑の豊かなキャンパスで、受講を希望する20数名の学部3・4年生との新しい出会いがありました。

講義のテーマは「ビジネスメールの書き方とマナー(社外編)」とし、仕事がスムーズにいくために必要なEメールの書き方を、課題をやりながら一緒に考えていきました。最後に「東海大学の行事に桜井を招待する」メールをだすことを課題とし、しめくくりました。単発の講義でしたが、学生は熱心に受講してくれました。

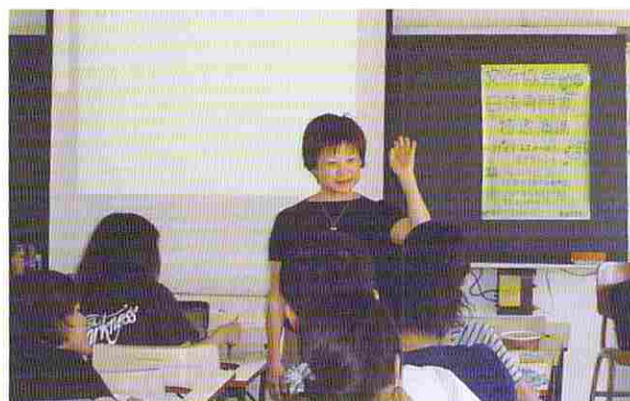
当「日本語専門家派遣事業」は公募制で、全国どこの学校からもご応募頂けます。地理的な問題で日頃センターの研修会には参加しづらい、という学校の先生方にもこの機会をご利用頂ければと思います。一定期間の集中講義もお受けしていますし、その他、例えばネイティブの日本語教師がいない、また学校に日本語教師が一人だけ、というような場合、この事業を利用し、日本語専門家とともに、学生や生徒達により有効な授業を提供するためのアイデアを考えたり、協力して授業を行ったり、というような活用の仕方も可能です。

日本語専門家が様々な学校に伺い交流を深めることは、現場のニーズを把握して今後の事業にいかす上で、センターとしても貴重な機会だと考えます。多くの学校のご応募をお待ちしています。

<申請の方法>

派遣は無料ですが、交通費等の実費は学校負担となります。詳しくは日本語センターホームページをご覧ください。ご不明な点はどうぞお気軽にご相談ください。

(桜井ちよこ、高雄事務所日本語専門家)



東海大学での講義中

日台ワーキング・ホリデー(WH)制度について

1. 緊密且つ友好的な日台関係

日本と台湾との間には、皆様よくご存知のように、各方面での深い繋がりがあります。経済関係では、2008年の日台間の貿易総額は640.8億米ドル(日本→台湾：465.2億米ドル、台湾→日本：175.6億米ドル)であり、台湾から見て日本は第2位の貿易相手、日本から見て台湾は第4の貿易相手国でした。また同年の人的往来では、約139万人の台湾人が日本を訪れ、約109万人の日本人が台湾を訪れました。その他にも文化交流や学術交流も頻繁です。更に、当協会が昨年末に実施した世論調査では、38%の台湾人が最も好きな国として日本を挙げ(第一位)、約7割が日本に対して親しみを覚えると回答しました。駐日台北経済文化代表事務所が今年4月末に実施した世論調査では、56%の日本人が台湾を身近に感じると回答し、65%が台湾に対して信頼感を示す結果が出ました。

2. WH制度の位置付け

このような密接且つ良好な関係が日台間にはあります。この関係を今後とも維持し、発展させるためには、将来を担う日台の青少年の相互理解が必要不可欠です。そのため、当協会には奨学金に加え、日台青年交流事業(大学院生の相互訪問)、台湾人高校生招聘及びMatch-Match.Net*等の諸事業がありますが、今年4月に発表した日台WH制度もその一つと位置付けることができます。

3. WH制度とは

一般に、WH制度とは、他方の国・地域の青少年に対して自国の国・地域の文化や一般的な生活様式を理解する機会を提供するため、一定期間の休暇を過ごす活動とその間の滞在費を補うための就労を認める制度(就労はあくまで休暇の付随的な活動として認められません。なお、バー、スナック、キャバレー等の風俗営業または性風俗特殊営業が営まれている営業所での就労は認められません。)です。本制度は、双方の青少年を長期にわたって相互に受け入れることによって広い国際的視野をもった青少年を育成し、ひいては両国間の相互理解、友好関係を促進することを目的としています。

4. WH査証の発給対象

日台間のWH制度では、以下の方を査証の発給対象としています。

- ① WH査証申請時に台湾の居住者であること。
- ② WH査証の申請時の年齢が18歳以上30歳以下であること。
- ③ 一年を超えない期間、日本において主として休暇を過ごす意図を有すること。

- ④ 以前にWH査証の発給を受けていないこと。
- ⑤ 被扶養者を同伴しないこと(当該被扶養者に査証が発給されている場合を除く)。
- ⑥ 有効な台湾護照(身分証番号の記載のあるもの)を所持すること。
- ⑦ 台湾に戻るための旅行切符又はこのような切符を購入するための十分な資金を所持していること。
- ⑧ 日本国における滞在の当初の期間に生計を維持するための十分な資金を所持していること。
- ⑨ 健康であり、健全な経歴を有し、かつ犯罪歴を有しないこと。
- ⑩ 日本国における滞在中に死亡し、負傷し又は疾病に罹患した場合における保険に加入していること。

5. 台湾の青少年の皆様へ

日本は先端技術と伝統技術、ポップカルチャーと伝統文化とが混在し、それが人々の生活や考え方にも深く根付いている国だと言われていています。また一般的に、日本人は初対面の人に対して遠慮がち、恥ずかしがり屋の面を持ち合わせている側面があるようですが、深く知り合ってみると親切で、他人に対する思いやりにあふれた人々が多くいることに気付くでしょう。そのような日本の文化や社会、日本人と触れ合うことは、好奇心を刺激する得がたい経験となり、皆さんの世界観を大きく広げてくれるはずです。是非皆さんWH査証を使って日本社会に飛び込み、たくさんの友人を作ってください。そして、皆さんと一緒に日本と台湾の交流の未来を切り拓けることを期待しております。

*日本交流協会Match-Match.Net

<http://www.jt-match.org.tw/>

いろは29号 目次

- 1～2 ページ 台湾における年少者を対象とした日本語教育
- 3 ページ 「うまく言えない」を尊重する—TAEを応用した日本語教育—
- 4 ページ インタビュー 第4回
徐興慶氏(台湾大学日本語文学系教授兼系主任、台湾大学日本語文学研究所教授兼所長)
- 5 ページ 2009年度台湾人日本語教師本邦研修報告
「日本語専門家派遣事業」がスタートしました。
- 6 ページ 交流協会からのお知らせ